

マルクス主義の創始と発展（二）

井 上 周 八

- 一 はじめに
- 二 マルクス主義の思想・世界観・哲学について
- 三 高等学校卒業ごろまでのマルクスの思想
- 四 大学入学より学位論文提出ごろまでのマルクスの思想

一 はじめに

奴隷の出現は人間が自己の再生産に必要な生産物（必要生産物）以上の生産物（剰余生産物）を生産することが可能になったことをその物質的基礎としている。剰余生産物をどの階級が搾取するかによって、その社会の性格が確定する。すなわち、剰余生産物を奴隷所有者が取得する社会が奴隷制社会であり、封建領主が取得する社会が封建社会であり、資本家階級が取得する社会が資本制社会である。そして、勤労人民大衆のつくり出した剰余生産物を、人民自

身が自分たちのものとして、自分たちの幸せの実現のために使用する社会が、ほかならぬ社会主義社会であり、その高次の段階が共産主義社会である。封建社会が奴隷制社会にくらべて勤労人民にとってより良いより進歩的な社会であり、資本制社会が封建社会にくらべて勤労人民にとってより良いより進歩的な社会であったように、社会主義社会は資本主義社会にくらべて勤労人民にとってより良いより進歩的な社会であることはいうまでもない。なぜなら歴史のこのような発展につれて人間の自主性が確立されてきたからである。

マルクスが『共産党宣言』を発表した一八四八年は、日本ではまだ徳川封建社会であり、また資本主義諸国の資本主義そのものも独占段階に移行するまえであった。それが現在、地球上陸地面積の四分の一は社会主義国であり、世界人口の三分の一は社会主義国の住民である。

現在、あれこれの社会主義国の好ましくない現象をみて、現状維持による受益者たちは勇気づけられ、その代弁者たちは「社会主義神話」の崩壊を口にしている。しかし、歴史の法則と、より良い社会を実現しようとする勤労人民大衆の志向によって、やがて地球上から搾取社会、階級社会が一掃され、人類の前身に終止符が打たれ、人類の本史が出現するようになることは必然である。そして、マルクス主義という新世界観Ⅱ哲学を創始し、剰余価値法則や、社会発展の法則を解明して、プロレタリアート解放と全人類解放の理論を人類史上はじめて確立したのは、周知のようにマルクスとエンゲルスであり、本年三月一四日は、この偉大な革命家であり、学者であり、人類社会の未来像を科学的に予見したカール・マルクス逝去一〇〇周年にあたり、また五月五日はその生誕一六五周年にあたる。世界各地でマルクス逝去一〇〇周年を記念して各種の行事や集会がもたれ、日本でも記念集会が行われ、記念号が出版されたりしている。

マルクスとエンゲルスの誠実な弟子であり友人であり戦友であったヴィルヘルム・リーブクネヒト (Wilhelm Liebknecht, 1826~1900) は、一八八三年三月一七日にハイゲート墓地のマルクスの墓前で、ドイツの労働者階級の名において次のように誓った。

「悲しむかわりに、われわれは偉大な故人の精神に従って行動しよう。彼が教え、志向したものが、できるだけ早く実現されるよう、全力をかたむけて努力しよう。これこそ、彼の思い出をたたえる最良の道なのです。

死してなお生ける友よ！ われわれはあなたが示した道を、目的を達するまで歩むであろう。われわれはあなたの墓にこのことを誓います！」「エンゲルス「マルクスの葬儀」、『マルクス・エンゲルス全集』（以下単に『全集』と略）、第一九卷、大月書店、三三五ページ。なお、訳文は必ずしも全集訳によらない。」

またフリードリヒ・エンゲルス (Friedrich Engels, 1820~1895) は彼の友の生涯と事業をたたえて次のように述べた。

「ヨーロッパとアメリカの戦闘的プロレタリアートが、歴史科学が、この人を失ったことの損失のほどは、まことにはかりしれぬものがあります。この巨人の死によってあけられた空白は、まもなく深く感じられることでしょう。

ダーウィンが生物界の発展法則を発見したようにマルクスは人間の歴史の発展法則を発見しました。……

それだけではありません。マルクスは今日の資本主義的生産様式と、それが生みだしたブルジョア社会との特殊な運動法則をも発見しました。……

一生のうちにこうした発見を二つもすれば十分といえましょう。さいわいにしてこうした発見を一つだけでもすることのできる人は、それだけでしあわせです。だがマルクスは、彼が研究したどの個々の分野でも——しかもこの

分野はきわめて多く、また彼が上つたらしかなでなかつたような分野はひとつとしてありませんでしたが——どの分野でも、数学の分野でさえ、独自の諸発見をしました。

学識の徒としては右のごとくでした。でもこれは、まだこの人の半分をも示すものではありませんでした。マルクスにとつては、科学は歴史の動力、革命的な力でした。彼が、実用化の予想がおそらくまだ全然つかなくても、なんらかの理論的科学的分野で新しい発見がなされると、どんなにそれを純粹によるこぶことのできた人だったとしても——それが、産業に、歴史的発展一般に、ただちに革命的な影響を及ぼす発見である場合には、彼は格段にちがったよろこびを感じました。……

というのは、マルクスは、なによりも革命家だからです。資本主義社会とそれによってつくりだされた国家制度との打倒に、あれこれの方法で協力すること、近代プロレタリアートの、すなわち彼がはじめて自分自身の地位と自分の欲求とを意識させ、みずからを解放する条件を意識させた近代プロレタリアートの解放に協力すること——これが彼の一生の真の使命でした。闘争は彼の本領でした。そして彼は、たぐいまれな情熱とねばりつよさと成功をもつてたまたまいました。……

そしてマルクスが当時最も憎まれ、最も誹謗された人だったのは、このためでした。政府は、専制政府も共和政府も、彼を追放し、ブルジョアは、保守的ブルジョアもウルトラ民主主義的ブルジョアも、きそつて彼に中傷の虚言をあげせました。彼は、このすべてをクモの巢のようにはらいのけ、それをものともせず、万やむをえないときにしか答えませんでした。そして彼は、シベリアの鉱山から全ヨーロッパとアメリカをこえてカリフォルニアまでにわたつて住む何百万という革命的同志から尊敬され、愛され、悲しまれながら没しました。そして私は、彼にはなお反対者

がたくさんいたでしようが、個人的な敵はほとんど一人もいなかったと断言できません。

彼の名はいく世紀にもわたって生きつづけるでしょう。そして彼の事業もまたしかりでありましょう！」(同上、三三二〜三三三ページ)

エンゲルスが右の葬送の辞で述べたようにマルクスの名は、文字通り現代に生きており、マルクス主義は今日、レーニン主義からさらにキマイルソン主義へと創造的に生き続け、発展しつづつある。

朝鮮労働党中央委員会政治局常務委員会で党中央委員会の金正日書記は、カール・マルクス生誕一六五周年・逝去一〇〇周年に際し、朝鮮労働党中央委員会政治理論機関誌『勤労者』一九八三年第五号に論文「マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう」を発表した。この論文の冒頭で金正日書記は次のように述べている。

「国際労働者階級の偉大な指導者であり、科学的共産主義学説の創始者であるカール・マルクスが生存し活動した時から一世紀の歳月が流れた。

カール・マルクスは人類解放偉業に偉大な貢献をなし、その不滅の業績によってマルクスの名は今日なお万国の労働者階級と人民の胸に貴く宿っている。

マルクスの生涯は傑出した思想家、理論家、偉大な革命家の生涯であった。

マルクスは国際共産主義運動の始源を開き、労働者階級と人民大衆の自由と解放をめざす闘争に根本的な転換をもたらした。進歩的人民は、労働者階級と勤労人民の神聖な革命偉業に捧げられたマルクスの輝かしい生涯と大いなる貢献を永久に追憶するであろう。

マルクスの人類に対する最も大きな貢献は、マルクス主義を創始して労働者階級に解放闘争の強力な思想的・理論的武器を与えたことである。」

金正日書記はこの論文で、マルクスの革命活動と業績を概括し、マルクス・レーニン主義を創造的に具現して朝鮮労働党と人民が収めた勝利について分析している。

朝鮮の革命と建設のなかで創始され完成されてきたチュチェ思想と、このチュチェ思想をもとにした理論と方法の全体系であるキムイルソン主義は、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させたものである。チュチェ思想がマルクス・レーニン主義と原理・原則において一致することを、この論文は「金日成同志によって明らかにされた主体的な立場と原則は、共産主義運動の原理とマルクス・レーニン主義の原則に合致する」ものであると確言している。

さてチュチェ思想の、したがってまたキムイルソン主義の創始について、私たちは金日成主席の諸著作や、またとくに一九八二年二月末日に発表された金正日書記の論文「チュチェ思想について」によって知ることができるが、私たちはマルクス主義そのものの創始についても明確に知っておかなくてはならないであろう。

淡野安太郎氏が述べているように、「マルキシズムは通常、ドイツの古典哲学とフランスの社会主義思想とイギリスの古典経済学と、この三つの総合によって生れた、と称せられる。総合されたものとして歴史の試練に堪えつつ今日に至ったものである以上、それぞれの構成要素のもっているよさが、その結びつきの中で活かされていなければならぬ。ない筈であるが、出来上った形で公式化されてしまうと、とかくそのなまなましが失われて、生命のない単なる『粹』の様なものにされてしまいがちなのは、誠に遺憾なことであるといわねばならぬ」〔初期のマルクス——唯物史観の成立過程——〕、勁草書房、一九五六年一月、一ページ）のである。「真に生命ある思想は、いわゆる『イズム』化さ

れた・出来上った形においてよりは、むしろ出来上って行く途上のなまなましい姿においてこそ、却ってよくその真髓に触れることができる」(同上)のである。しかしマルクス主義の創始と発展過程について知ることは簡単ではない。なぜならマルクス主義と呼ばれる「プロレタリアート解放」のための、したがってまた「全人類解放」のための理論と、この理論を支えている哲学は、ヨーロッパの哲学の最良の成果を前提とし、これらの成果を包摂し、その欠陥を克服することによって、はじめて創始されたものだからである。

次にマルクス主義哲学とは何であるか、それはどのように理解されてきたかについてみておこう。

二 マルクス主義の思想・世界観・哲学について

世界観、哲学という用語がよく使われるが、一般にマルクス・レーニン主義では世界観や哲学をどのようなものと規定しているのか。マルクス・レーニン主義は、プロレタリア解放のための戦略と戦術であり、理論であり、この理論の哲学的基礎が唯物弁証法(それを歴史に適用したものが唯物史観または史的唯物論)である。

マルクス主義以前の哲学は観念的・宗教的な要素の混入した世界観で、歴史を過去にさかのぼればさかのぼるほど、人間は自然科学および社会科学の知識が乏しく、それゆえ、世界をどのようにみるかという問題について、かつては神が世界をつくったとか、あるいはヘーゲルのように世界史は絶対精神の自己展開であるとかいうように、イデオロギイ・観念・理性を基本原因として自然と社会の変化発展が行われるとみていた。つまり、昔の人は自然科学および社会科学が未発達であったがために、何か超歴史的、超物質的な力によって社会や世界が形成され、人間の運命が決定されていると考えたのである。

これに対してマルクスとエンゲルスは、人間の観念、考え方、意識、思想の基礎にあり、これらを規定するのは物質であり、客観的存在であるということを明らかにした。

唯物論は観念を第一原因とするのではなく物質を第一原因として事物をみる。マルクス主義では、世界という表現も、物質という表現も、存在という表現も全部同じものをさす。結局その意味するところは、人間が頭の中であれこれと思つるうちに客観世界が存在したということである。人間そのものも物質の一定の発展段階で生まれ、物質のもつとも発達したものが人間の脳髓である。

ところで、客観的に存在する物質はすべて法則をもっている。物質のもっている法則をマルクス主義では弁証法と名づけている。つまり、観念とか神とか宗教を基本にして事物を考えるのではなくて、事物の第一原因、存在の根本は物質であるというところから唯物論といわれるわけであり、物質が法則をもっているということから、物質のもっている法則を弁証法というわけである。物質は必然的に弁証法という性格をもっているから、唯物論といえば弁証法を意味し、弁証法といえば必ず唯物論を意味する。それゆえ弁証法的唯物論または唯物弁証法という言い方がなされる。

唯物弁証法はそれ以前の宗教的および観念的な世界観に対して科学的な世界観である。たとえば旧約聖書には天地創造の物語があり、「神ひかりあれといたまへば、すなはちかくなりき」というような文章がある。日本の神話では、海を剣でかきまわして、その雫がおちて日本列島になったという言い方がされている。これらは何か超自然的なものが客観世界をつくつたという考え方であるが、このような考えは事実上すべて間違ひであるということは、今日、科学によって明らかにされた疑う余地のないものである。今日の科学によって、地球には無生物の時代があり、最初

に海中に生物が発生し、やがて陸上に生物が生まれ、そのような生物のなかから哺乳類が生まれ、人類が出現したことが明らかにされており、したがって最後に発生した高等動物である人間の脳髓から生まれる観念が客観世界をつくり出したということはありえない。

マルクス主義の哲学的唯物論の特徴は次の点にある。

(1)世界にあるありとあらゆる現象は、運動している物質の種々の形態であり、世界は物質の運動法則にしたがって発展する。すなわち弁証法は、自然(物質、存在、世界といっても同じ)を、たがいに切りはなされ、たがいに孤立し、たがいに独立した物や現象の偶然的な集積とはみないで、物や現象がたがいに有機的につながりあい、たがいに依存しあい、たがいに条件づけあつて、一つの統一ある全体を形づくっている、と考える。だから、自然、物質、存在、世界のどのような現象も、それを周囲の諸現象と関連させないで、それだけ孤立させてとりあげるならば、正しく理解することはできない、と考える。また弁証法は、自然を静止したもの、動かないもの、停滞したもの、変わらないもの、とはみないで、たえず運動し変化しているもの、たえず新しくなり発展しているもの、とみる。だから、自然でも社会でも、つねにあるものが発生し発展しており、つねにあるものが破壊されて自分の生命を終わりつつある、と考える。弁証法的方法にとつてなによりも重要なものは、一定の瞬間に永続的にみえても、すでに滅亡しはじめているものではなくて、一定の瞬間に永続的にはみえなくても、発生し発展しつつあるものである。弁証法は、事物の発展過程を、小さい、かくれた量的変化が積み重なることにより、はつきりした根本的な質的変化が起こるような発展、すなわち、質的変化が、漸次的に起こるのでなく、急速に、突然に、ある状態から他の状態への飛躍的移行の形で起こるような発展だとみる。だから、事物の発展過程は、同じことの単純な繰り返しではなく、前進運動であり、

上向線にそっておこなわれる運動であり、古い質的狀態から新しい質的狀態への移行であり、単純なものから複雑なものへの、低いものから高いものへの發展である、と考へる。そして、弁証法は、すべてのものにはそれぞれに内在する固有な矛盾があつて、この固有矛盾がそのものを發展させる原動力であり、そのものがどんな形態をとつて發展するかをきめる、と考へる。

(2)物質世界は人間の意識（心、精神、観念）の外に客観的に（人間の意識、考へから独立して）存在するものである。そして、人間の意識、考へは客観的に存在する物質的世界の人間の頭脳（この頭脳も高度に發達した物質である）への反映である。

レーニンマルクス主義の認識論を反映的模写論とよんでいた。だが、人間は客観世界を無条件に、直接鏡に映すように認識できるものではない。レーニンは人間が客観世界を反映し、模写する場合の形式について、次のように述べている。

「認識は人間による自然の反映である。しかしそれは単純な、直接的に、全一的な反映ではなく、一連の抽象の過程であり、諸概念、諸法則などの定式化、形成の過程であり、そしてこれらの概念、法則など（思惟、科学）論理的理念）こそは永久に運動して發展している自然の普遍的な合法性を条件的、近似的に把握するものである。ここには実際に客観的に三つの項がある。(1)自然、(2)人間の認識、人間の脳髓（同じ自然の最高の産物としての）および(3)人間の認識における自然の反映の形式である。この形式がもろもろの概念、法則、カテゴリーなどである。人間は、自然を全体として完全に、すなわち自然の『直接的な総体性』を把握する、反映することはできない。人間は抽象、概念、法則、科学的世界像、等々をつくりながら、永久にそれに接近していくことができるだけである。」（『哲学

ノート』、『レーニン全集』第三八卷、大月書店、一五二〜一五三ページ）

(3)このようにマルクスの唯物論は、カントとは違って、物質世界は認識することのできないものではなくて、科学と科学の理論の応用、実践、物質世界の改造への適用とによって、その正しさは検証できるものである、とする。この点が弁証法的唯物論とマルクス・エンゲルス以前の機械的唯物論とのちがいの一つである。機械的唯物論も、意識は物質の反映であることは認めるが、実践をとおして反映 \parallel 認識が正確であるかどうかを検証でき、認識したことを実践するという行為の繰り返しによって、人間の認識が次第に正しくなっていくものであることを明らかにしなかった。このため、意識が物質を正しく反映することができ、人間が主体的に客観世界（このなかには第二の自然としての社会もふくまれる）を改造することができることを説明できなかった。

マルクス主義では社会も物質とみる。マルクスは社会を第二の自然といっている。第一の自然である本来の自然と第二の自然である社会の両方をふくめて、一言で世界という。それゆえマルクス主義の世界観は唯物弁証法であるといえる。これを明らかにしたのがマルクスとエンゲルスであり、のちにレーニンがさらに研究して『哲学ノート』や『唯物論と経験批判論』その他のなかで自然科学の成果をとりいれて唯物論を發展させた。

いまでは私達は自然科学の成果によって、客観的事物が法則をもっており、人間がそれを意識しようがしまいが、物質は最初からあったということを知っている。人間が電気の法則を発見する以前には電気の法則はなかったのかという、それは最初から存在していたが、ただ人間があとからそれを発見しただけである。人間による法則の発見は人類の知識の發展をもたらすが、人類が自然についての知識をふやすということは、人間とは無関係に存在していた法則を人間があとから理解したということである。これからも人間が理解して行く分野はたくさんあり、現時点にお

いても私達が知らないことはたくさんある。しかし、人間が知らないことがあるということと、それらが世のなかに存在していないということとは異なる。

このようにマルクス・レーニン主義の世界観、哲学は一言でいって唯物弁証法であり、史的唯物論であるということができる。

では、これまでのマルクス主義は哲学をどのように規定していたか。それは、一言でいえば、自然、社会および思惟のもっとも一般的な発展法則に関する科学であるとみていた。これが従来のマルクス主義における哲学の規定である。ここで思惟ということばは思想と置きかえても意識と置きかえてもそんなに違いはない。

戦後いち早く一九四七年に岩崎書店から『哲学小辞典』が翻訳出版された。そのなかの「哲学」という項目には次のように書かれている。「哲学とは、弁証法的唯物論においては、自然、社会および思想のもっとも一般的な発展法則に関する科学であり……」ここでは思想ということばになっているが、別のところでは思惟とも書かれている。そして、この『辞典』では哲学の根本問題は「思惟の存在に対する関係に関する問題である」とされている。

自然は法則をもっており、社会も法則をもっている。マルクス主義で社会発展の法則といえは、生産力と生産関係の矛盾によって歴史は発展するということである。従来、社会や歴史にそのような法則があるということは誰も気がつかなかつた。英雄豪傑が歴史をつくったとか、神の摂理によって社会は発展するとか、あるいは人民大衆が歴史をつくるのだから、そもそも社会の発展に何らかの法則があるなどとは考えられなかつた。社会にも自然と同じように法則があるなどとは誰も考えなかつたのである。

しかし、マルクスは「経済学批判序説」のなかで有名な唯物史観の公式を明らかにした。それを一言でいえば、歴

史は生産力と生産関係の矛盾によって発展するということである。

マルクス主義は神や観念や精神や理性を本源的とみるのではなく「物質的生活そのものの生産」を本源的とみる。マルクスとエンゲルスが新世界観を形成するにあたって第一に強調したことは、人間的存在の、したがってまたあらゆる人間の歴史の前提をなすものは、人間による自分自身の生産と子孫の生産であることを確認することであった。すなわち、『ドイツ・イデオロギー』のなかで次のように述べている。

「第一に、人間は生きるためには生活することが出来なければならない。そして生活するためには飲食、住居、衣服、その他のものがどうしても必要である。したがって人間が最初になした歴史的行爲はこれら衣・食・住に対する欲望充足手段の生産、すなわち物質的生活そのものの生産である。」(『全集』第三卷、二二二―二四ページ)

マルクスはこの点を簡單明瞭に、「人間は意識とか宗教とか、その他かつてなものによって、動物から區別することができ。だが、人間自身は、彼らが生活資料を生産しはじめるやいなや、自分を動物から區別し始める」(同上、一七ページ)と述べている。

人間以外の動物でも生産してはいないかという主張もある。というのは、ある種の動物は巢や住居をつくっているからである。しかし、動物は自分やその子どもたちが直接必要としているものだけを本能的に生産してはくれない。だから、動物の生産は「本能的」であり、「一面的」である。ところが、人間は自分自身の直接的欲望から離れて、「一般的」に生産する。それ故、マルクスは「動物は自分自身だけを生産する。ところが、人間は全自然を再生産する」(『経済学・哲学手稿』、『全集』第四〇卷、四三七ページ)と述べている。エンゲルスは一八九〇年九月二一日付のJ・プロッホ宛の手紙で「唯物史観にしたがえば、歴史における究極の決定的要因は現実的生活の生産および再

生産である……。それ以上のことは、マルクスも私もかつて主張したことがない」と書いている。

また周知のようにマルクスは『資本論』で資本主義から社会主義への移行が必ず起こることを明らかにした。彼は「市民社会の解剖は、これを経済学のうちに求めるべきである」として、社会生活のいろいろな領域のなかから、経済関係を、それ以外のすべての関係、すなわち、法律関係や、国家形態、および社会的・政治的・精神的な生活などを規定する、基本的な、本源的なものとして取り出しているが、このような、経済関係を重視し、社会発展の法則をとく鍵をそこに求める考え方こそは、マルクスが「フオイエルバッハにかんするテーゼ」（一八四五年春執筆）でその大綱を完了し、『ドイツ・イデオロギー』（一八四五～六年）で展開し、『経済学批判、第一分冊』（一八五九年に千部出版）の序言で定式化したところの、マルクスの「唯物史観」とか「史的唯物論」とよばれる考え方の基本にほかならない。マルクスがそこで展開した「人間の社会の歴史的發展法則」は『経済学批判』の序言のなかで周知のように次のように定式化されている。

「私は経済学の研究をバリではじめたのであるが、ギゾー氏の追放命令の結果私はブリュッセルにうつったので、さらにその地でこれをつづけた。私の到達した、そしてひとたび自分のものとなったのちは私の研究にとってみちびきの糸となった一般の結論は、簡単につきのよう定式化することができる。

人間はその生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した関係、生産関係にはいる。この生産関係は、彼らの物質的生産力の一定の発展段階に対応する。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造を形づくる。これが現実の土台であり、そしてそのうえに法律のおよび政治的な上部構造がたち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づける。人

間の意識が彼らの存在を規定するのではなくて、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、その生産力が従来その内部ではたらいてきた現存の生産関係と、あるいは同じことの法律的表現にすぎないが、所有関係と、矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展のための形態からその桎梏にかわる。そのときに、社会革命の時代がはじまる。経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造が、あるいは徐々に、あるいは急速に、変革される。このような変革の考察にあたっては、自然科学の正確さで確認できる経済的生産条件における物質的変革と、人間がこの衝突を意識しかつこれをたたいぬくところの法律的・政治的・宗教的・芸術的あるいは哲学的な、つまりイデオロギー的な諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人の人物を、その個人が自分をどう考えているかにしたがって判断できないのと同じように、このような変革時代を、その時代の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、社会的生産力と生産関係とのあいだに現存する矛盾から説明しなければならぬ。一つの社会構成体は、それがいれうるだけのすべての生産力が発展しきるまではけつして没落するものではなく、また、新しい、より高度の生産関係は、その物質的な存在諸条件が旧社会自体の胎内で孵化しおわるまではけつして従来のものにとつてかわることはない。だから、人間はつねに自分が解決しうる課題だけを提起する。なぜなら、いっそうくわしく考察するならば、問題そのものは、その解決の物質的条件がすでに現存しているか、あるいはすくなくとも成立しつつかあるか、のばあいだけにはじめて発生することがつねにわかるであろうから。大づかみにいって、経済的社会構成体のあいつく諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の諸生産様式 *asiatische, antike, feudale und modern bürgerliche Produktionsweisen* をあげる（こと）ができる。ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態

である。ここに敵対的というのは、個人的敵対の意味ではなくて、諸個人の社会的な生活条件から生じる敵対の意味である。しかし、ブルジョア社会の胎内に発展しつつある生産力は、同時にこの敵対の解決のための物質的条件をつくりだす。だから、人間社会の前身はこの社会構成体とともに終りをつけるのである。」（『全集』第一三卷、六〇七ページ）ここにマルクスによって発見された「社会発展の法則」が一般的結論として定式化されている。マルクスが右の定式において述べたことを箇条書にすれば以下の通りである。

- (1) 人間はその社会的な生活においてある与えられた生産関係にはいる。
- (2) この生産関係は生産力の一定の発展段階に対応する。
- (3) 生産関係の総体は社会の経済的構造を形づくる。
- (4) 社会の経済的構造は現実の土台である。
- (5) この土台のうえに法律的・政治的な上部構造が立つ。
- (6) またこの土台に照応して社会的意識諸形態が生まれる。
- (7) 物質的生活の生産様式が社会的・政治的・精神的な生活過程一般を条件づけ、規定する。
- (8) 人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に人間の社会的存在が彼らの意識を規定する。
- (9) 生産力は当初その発展のために役立つ生産関係（その法律的表現である所有関係）とやがて矛盾するようになり、生産力発展の桎梏となる。このとき社会革命の時代が始まる。
- (10) 経済的基礎の変化とともに、巨大な全上部構造が徐々に、あるいは急速に変革される。

(11) このような変革の考察にあたっては、自然科学の正確さで確認できる経済的・生産条件と、イデオロギーの衝突・

闘争を区別しなければならぬ。

(12) 変革の時代は、その時代の意識から判断するのではなく、生産力と生産関係の矛盾から説明しなければならぬ。

(13) 一つの社会構成体は、それがいれうるだけのすべての生産力が発展しきるまでは、決して没落するものではない。

(14) また、新しい、より高度の生産関係は、旧社会自体の胎内でその物質的条件が孵化し終わるまでは、決して旧社会にとってかわることはできない。

(15) 大づかみにいって、経済的社会構成体のあいつく諸時代として、アジア的・古代的・封建的・近代ブルジョア的の生産様式をあげることができる。

(16) ブルジョアの生産関係は、社会的生産過程の最後の階級的形態である。

(17) ブルジョア社会の胎内に発展しつつある生産力は、同時にこの社会の敵対の解決のための物質的条件をつくりだす。

(18) ブルジョアの生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。

(19) だから人間社会の前史はブルジョア社会とともに消滅する。

エンゲルスは「生産手段が社会によって掌握されるとともに、商品生産が除去され、それと同時に、生産者にたいする生産物の支配が除去される。社会的生産内の無政府状態は、計画的・意識的な組織によってとってかわられる。

個人的生存のための闘争はやむ。こうしてはじめて人間は、ある意味で、動物界から決定的に分離し、動物的な生存

条件から真に人間的な生存条件にはいりこむ。いままで人間を支配してきた、人間をとりまく生活諸条件という外圍は、いまや人間の支配と統制のもとにはいり、人間はここにはじめて自然にたいする意識的なほんとうの主人となる。つまり、人間が自分自身の社会化の主人となるからであり、またそうなることによってである。彼ら自身の社会的行動の法則は、これまでは、彼らを支配する見しらぬ自然法則として、彼らに対立してきたのであるが、いまや人間によってじゅうぶんな専門知識をもって応用され、したがって彼らによって支配されるようになる。人間へ自身の社会化は、いままでは、自然と歴史とによってむりじいされたものとして人間に対立してきたのであるが、いまや彼ら自身の自由行為となる。これまで歴史を支配してきた客観的な見しらぬ諸力は、人間そのものの統制のもとにはいる。このときからはじめて、人間は彼らの歴史をば、じゅうぶんな意識をもって自分でつくるようになる。このときからはじめて、人間によってうごかされる社会的諸原因は、主として、ますますすばらしい程度で、人間の欲するままの結果をうむことになる。これは必然の国から自由の国への人類の飛躍である」(『反デューリング論』、『全集』第二〇卷、二九二ページ)と述べている。

次に思惟も法則をもっているという点であるが、思惟とは自然や社会の法則を人間が脳髓によって認識する、その認識そのもののもつ法則である。客観世界には法則があり、それを人間が脳髓でとらえる。人間が脳髓で法則をとらえるということは、人間が社会的存在として獲得した高度の言語能力によって自然と社会の法則をとらえるので、言語によってなされる思惟そのものも法則をもつということである。

客観的な真実を反映する用語を、範疇、概念、表象という。たとえば経済学でいえば、「価値」とか「剰余価値」とか「生産価格」とかはいずれも経済社会の本質を示すことばである。これらのことばによって人間は客観世界の法

則を認識するわけである。客観世界のもっている運動法則が人間の脳髓にことばとして理解された場合に、客観世界の法則が脳髓に反映し、人間の思惟となる。したがって客観世界が法則をもっており、その法則を人間が脳髓で受けとめるのであるから、脳髓で受けとめた理解・認識すなわち思惟も法則をもつのである。これを思惟の法則と呼ぶ。このように、認識され、意識された人間の思考、つまり思惟も法則をもつのである。

マルクス主義の哲学は、自然、社会およびそれを認識する思惟の法則の一般的性格を明らかにしている。反対物への転化とか、否定の否定とか、量から質への転化などの弁証法の諸法則は、あらゆる科学のもっている法則の一般的性格を要約したものである。天文学や地理学、物理学や気象学という個別科学は、それぞれの個別的な分野における真理・法則を明らかにするが、哲学はすべての個別科学に共通する法則を明らかにする。

マルクス主義では哲学を以上のようにとらえているが、マルクス主義以前において哲学の根本問題として論争になつたのは、物質がさきか、それとも意識がさきか、ということであつた。この問題については、マルクスが明らかにしたように、観念が本源的ではなく、物質が本源的であり、また事物のもっている發展法則は弁証法的なものであつて、決して形而学的なものではない。

(1) ここで注意しなければならないことは、物質より精神があとから生まれたということとは、精神、思想、意識の役割が物質より小さいということを意味するものではないということである。意識の本源的な發生原因は物質であるが、ひとたび發生すれば意識は事物を變革する強力な力になる。そのことは、物質と意識のどちらがさきかということとは別なことなのである。

ところで、私達は以上のようなマルクス・レーニン主義哲学の通俗的解釈に安住することはできない。哲学は「科学の科学」であるといわれている。個別科学は自然科学と社会科学に分れており、自然科学は自然の、社会科学は社

会の諸現象を対象とする。自然という客観的存在物は多様な諸規定の統一であるから、自然科学には天文学、気象学、物理学など、いろいろな分野があり、これに対して社会科学は社会現象を対象としており、社会現象には経済的分野もあれば政治的分野もあり、社会科学にもそれぞれ経済学や政治学という個別科学がある。このように科学は社会科学と自然科学の二つの分野に分類される。

前述のようにこれまでのマルクス主義哲学の通説的解釈は自然、社会、人間の思惟の三つの一般法則を研究するのが哲学であるとしていた。自然と社会（このなかに人間がふくまれる）を合わせたものが世界であり、つまり哲学は簡単にいうと世界観である。自然科学は自然を研究对象としており、社会科学は社会を研究对象としているが、哲学は世界を研究对象としている。世界を研究对象とし、世界の一般的法則を研究するが故に哲学は世界観なのである。

以上のようにマルクス主義における哲学とは自然と社会および人間の思惟の一般的発展法則を研究する科学であり、客観世界の法則について明らかにする科学だといわれているが、哲学の任務は果してこれだけであろうか。哲学には、このほかに、人は何のために生きるのか、人生の意義とは何かという人生観としての意味がある筈ではないか。マルクス主義哲学の通俗的定義には、この人生観が欠落している。哲学は自然、社会および人間の思惟に関する一般法則であるというだけでは人生観が出てこない。科学それ自体は人間の生き方を教えることはできない。たとえば経済学や電子工学をいくら勉強しても、いかに生きるべきかということ自体は分らない。科学は人間の生き方を直接教えるものではない。哲学を自然、社会および人間の思惟に関する一般的諸法則を研究する科学であるとするマルクス主義の通俗的規定によれば、人間の生き方が含まれないことになる。

個別科学は世界の一定範囲をその研究对象とする。たとえば天文学は天体を研究し、地質学は地殻を研究し、植物

学は植物界を研究し、動物学は動物界をそれぞれの研究対象としている。また社会科学は政治学、経済学、歴史学、法学など社会の各分野、各側面を研究対象としている。しかしこれらの個別科学はいずれも世界を全体としては研究していない。それゆえ個別科学は世界観を与えることはできない。なぜなら、世界観とは世界を部分的に明らかにするのではなく、全体としての世界に関する知識、または認識を明らかにしなければならないからである。全体としての世界に関する認識は哲学、世界観によってのみ与えられる。しかし哲学や世界観を単に科学として定義づけてしまうのは誤りである。なぜなら人間の生き方の問題がそこにはないからである。哲学や世界観といえ、人間がいか生きるべきかということを究極的には問題にすべきものである。哲学は単に科学認識の問題ではなく、科学であると同時に、人間がどのように生きるべきかという問題に解答を与えるものでなければならぬ。

他方宗教は人間の生き方を教えるものであるが、宗教の致命的欠陥は科学ではないということである。宗教は科学にもとづかないで、人間の生き方を教えようとする。科学のよさを取りいれ、かつ宗教のよさも取りいれて、人間の正しい生き方を教えるものがなければならない。それがまさに真の哲学である。真の哲学はもつとも科学的でありながら、もつとも正しい生き方を私達に教えてくれるものでなければならぬ。

アインシュタインは一九四九年に「わたしはなぜ社会主義を支持するか」という論文を書き、そのなかで次のように述べている。「科学というものは目的をつくりだすことはできません。ましてその目的を人間に注入することはできないのです。たかだか科学はある目的を達成するための手段を供給することができただけです。」

科学それ自体は善悪の判断ができない。科学それ自体には目的がない。けれども、アインシュタインはさらに「目的そのものは高邁な倫理的思想をもつ人々によって考えだされる」と述べている。科学は目的を与えないけれども、

目的は人間が考えだすものだというのである。そして、「その目的が悲惨におわらずいきいきとして活気にあふれていけば、なかば無意識的に社会の漸次的進化を決定している多くの人間たちによって、採用され、またおしすすめられていくものです」（以上、『晩年に想う』中村・南部・市井訳、講談社文庫、一四八ページ）と続けている。つまり、科学的成果を人間が正しく利用すれば社会をよくすることができる、といっているのである。

宗教はいかに生きるべきかを教えるけれども、科学的内容がとほしく、また科学は客観的眞実を教えるけれども、いかに生きるべきかを教えないという矛盾がここにある。宗教は人間の本来の願い、理想を高く掲げるが、宗教それ自体はその理想を実現する力をもたない。キリストが生まれてから二〇〇〇年、釈迦が生まれてから二五〇〇年経ったが、現実の世の中はまだ理想とは程遠い。他方、科学は客観的法則を解明するが、科学それ自体には目的がない。むしろ原子力を開発することによって原子爆弾をつくり、人類を絶滅させる危機を生みだしている。広島、長崎をみても、科学の成果が人間の悲劇の原因となっていることは明白である。

そこで宗教はその理想を実現するための媒介として科学の力を借りなければならず、科学はまた宗教によって眞の目標を与えられなければならない。宗教は人間の願望であり、人間はよく生きようとする気持を宗教世界に託すのだから、人間が宗教心をもっていているということは、私達ひとりひとりの心のなかに幸せに生きなければいけないという気持があるということである。

このようにマルクス主義哲学の通俗的規定の欠陥はどのように克服されねばならないのか。マルクス自身は、後に見るようにその生き方そのものによって、彼の哲学を実践していたのである。

金正日書記は次のように指摘している。

「いままで、世界観とは周囲世界にたいする見解と表徴の体系と定義していました。古典家たちもこのようにみました。」

つまり、チュチエ思想以前では、周囲世界に対する見解、自然と社会に対する見方と、世界をひとつの表徴として体系的にまとめたものを世界観と規定してきた。しかし、書記は続けて次のように述べている。

「しかしわれわれは、世界観を単純な科学的認識の問題に局限させず、革命実践の見地から正しく定義しなければなりません。」

つまり、自然、社会および思维の客観的な一般法則が哲学だという表現のしかたは、哲学を単なる科学的認識に局限しているが、そのような通俗的解釈ではいけない、としているのである。すなわち、いかに生きるべきかということを明示するものでなければならないというのである。書記はこのことを次のように指摘している。

「一般に世界観とは、人間とそれととりまいている世界にたいする見解、立場、方法の全一的体系です。」

これは非常に正しい規定である。人間とそれととりまいている世界に対する人間の見解、立場とこの見解、立場に立って世界を变革する方法の全一的な体系、これが金正日書記による世界観・哲学の定義である。⁽²⁾

(2) 金正日書記の哲学・思想については拙著『現代朝鮮と金正日書記』(雄山閣、一九八三年二月)も参照されたい。

以上みた如く、一部の正しい理解者を除き、従来のマルクス・レーニン主義の哲学に対する通俗的定義は、周囲世界、つまり自然と社会がもっている法則を人間が認識し文章化したものの体系であり、認識の問題に局限されていたということである。すなわち、従来の哲学、世界観は世界の法則を認識し、その認識を概念化し、その概念化された

表象の体系であるとみていたということである。

しかし、マルクス自身は哲学をどのように考えて定式化してはいない。彼の生涯をみると、マルクスは哲学を客観世界に対する科学的認識であると局限してとらえてはいなかった。彼は「哲学者はさまざまに世界を解釈したけれども、大事なことはそれを変革することである」（『全集』第三卷、五ページ）といっている。マルクスはプロレタリア解放のためにその一生を捧げた人であり、偉大な革命家であった。彼が哲学を単なる客観世界の認識に局限していないことは余りにも明白である。そこで以下、マルクス主義の創始と生成について学び、マルクス主義と金日成主義キムイルソンおよびマルクス哲学と主体思想チュエギムの関係について考察しよう。

三 高等学校卒業ごろまでのマルクスの思想

まずマルクスの生い立ちと高等学校卒業までの彼の人となり、思想について簡単にふれよう。

マルクスは一八一八年五月五日、モーゼル河畔のトリールで、弁護士ハインリヒ・マルクスとその妻ヘンリエットの息子として生まれた。

マルクスが生まれたのは一八一五年のウィーン会議によって、ライン州を、したがってトリールを領有することになった反動的なプロイセンのユンカーと、彼らに支配されているベルリン政府の極端な専制政治下であった。しかし彼は、プロイセンで経済的にもっとも進んだ地方の、市民的啓蒙とヒューマニテイの精神が豊かに生きている家庭に育ち、多面的な教養をもつ父の影響下に成長した。マルクスの父は古典文学や古典哲学に親しみ、とくにレッシングやフランスの啓蒙思想家ヴォルテールやルソーの影響を受けた人であり、穏健な自由主義的見解の持ち主であった。

いうまでもなく、レッシング (Gottfried Ephraim Lessing, 1729—1781) はドイツの生んだヨーロッパ最高の啓蒙活動家の一人であり、芸術評論家であり思想家であり、民主主義の闘士であり、またヴォルテール (François-Marie Arouet de Voltaire, 1694—1778) とルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712—1778) はいずれも僧侶と絶対主義への批判家であり、一八世紀のフランスのブルジョア革命への途を準備した思想的貢献者である。このような思想の共鳴者であるマルクスの父がマルクスの人格形成に与えた影響は少なかつたであろう。

またマルクスの生涯の伴侶イエニーは勿論であるが、イエニーの弟エドガー・フォン・ヴェストファーレンとその父ルードヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンの影響も大きかつたことが、マルクスの手紙その他によって知られている。ルードヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンは高い教養をもち、自由な思想にみだされた人であつた。彼は早熟な隣人の息子マルクスが好きになり、またマルクスからも第二の父のように尊敬された。ルードヴィヒ・フォン・ヴェストファーレンはギリシア詩人ホメロスの詩『イーリアス』や『オデュッセイア』を愛読し、シェークスピアのドラマのかなりの部分を英語とドイツ語で暗唱し、ヒューマニスティクな文学への熱情を青年たちに語りかけることが屢々であつたという。だから、知識欲に燃えていたマルクスが父の友人であるこの人から、学校や多くの点では両親の家でさえ受けることのできない刺激を得たのである。だが、イエニーの父はマルクスに文学の面だけではなく、社会問題にも関心を向けさせた。毎日近郊の貧しい農民が集まる中央市場を通じて学校にかよい、散歩のときにこの町の貧民窟の窮状を見ていた少年カールは、父の友人がトリールの多くの市民が貧しい暮らしをしなければならぬのを嘆くことばに聞きいつたのであり、またマルクスはのちにフランスの空想的社会主義者サン・シモンの思想について始めて話を聞いたのはヴェストファーレン家においてであつたことを回想している。

さて、マルクスは一二歳でトリールのフリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナシウム（高等学校）に入学したが、この年はフランスの七月革命の年である一八三〇年であった。彼にとっては生涯の新しい時期が始まったのである。トリールのこの高等学校は、一八一五年以来プロイセンの文部省の管轄下にあったが、自由主義的な考えをもつ校長であり恩師であるヨハン・フーゴー・ヴィッテンバッハのおかげで、ここでもマルクスは啓蒙とヒューマニズムの精神を養うことができ、またこの学校の幾人かの著名な学者であり、専門的水準の高かった教師からも良い影響を受けたといわれている。

一八三五年九月、マルクスは一七歳で高校卒業試験に合格したが、その際マルクスが書いたドイツ語の作文「職業の選択にさいしての一青年の考察」(Betrachtung eines Junglings bei der Wahl eines Berufs)は、若きマルクスを知るための重要な資料である。すなわち、マルクスはこの作文で利己的な、あるいはまったく物質的な利益だけをもちにした職業の選択を否定し、「歴史は、全体のために働くことによってみずからを高貴なものとした人々を偉人と呼ぶ。経験は、大多数の人を幸福にする人をもっとも幸福な人とほめたたえる」(『全集』第四〇巻、五一九ページ)と書き、人間に奉仕し、現実を人間的なものにすることのなかに生涯の使命と幸福がある、と述べている。これは彼の恩師ヴィッテンバッハが主張し、しばしば生徒たちに話していた考えであったという。またこの作文でマルクスは、職業の選択が個人の努力だけに左右されるのではないとして、「……われわれは、自分の天職だと信じる地位をつねにつかみうるとは限らない。社会におけるわれわれの関係は、われわれが決定しうるまえに、おおむねすでにじまっているのだ」(同上、五一七ページ)と述べているが、この考えのなかに、マルクスが人間生活における与えられた条件としての社会的関係の意義をすでに意識し始めていることが示されている。彼は作文を次の言葉で結んで

いる。

「われわれが、最も多く人類のために働きうる地位を選んだなら、重荷によって挫折することはありえない。重荷は万人のための犠牲にはかならないからである。そのときわれわれのいなくよろこびは、貧弱な、狭い、利己的なよろこびではない。われわれの幸福は幾百万の人々のものであり、われわれの行為は静かに、だが永遠に生きつづけ、そしてわれわれの遺灰は高潔な人々の熱い涙でぬらされるであろう。」(同上、五一九ページ)

マルクスのそのこの生涯は実にこの若き日のみずからの言葉を実践することであった。

こうして、社会のため人類のために働くという希望をもった青年マルクスは、彼の伝記や全集をみればわかるように、やがてヘーゲル哲学を学んで、それを克服し、フォイエルバッハに心酔し、キリスト教を克服するとともにフォイエルバッハを乗り越えて、天上の批判(宗教や観念的哲学の克服)から地上の批判(法律、政治の批判から、さらに経済学的批判的研究)にその視点と活動方向を移し、プロレタリアートに科学的社会主義理論を与え、地上に人類の樂園を実現するために経済学の研究に着手し、プロレタリア解放(＝人類の解放)理論の完成とその実践のために全力を傾注することになるのであるが、しかし高等学校卒業当時のマルクスは、まだ何らかの確定した思想をもつ若者ではなかった。このことをドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所編集の『カール・マルクス＝フリードリヒ・エンゲルス全集、補巻、第一分冊』(Karl Marx-Friedrich Engels: Werke, Ergänzungsband erster Teil, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1968)につけられた序文は、次のように述べている。

「一八三七年(ベルリン大学入学二年目の年)にはいるまではマルクスはまだどんな特定の哲学的見解をもっていない

かった。そのころまでは彼の哲学的思想像は、彼がその父と、そしてたぶんまたその師ヨハン・フーゴー・ヴィッテンバッハの影響のもとでフランス啓蒙主義の思想と、カントその他のヘーゲルの先行者たちの哲学の個々の命題とに寄せた共感によって多かれ少なかれ形づくられた。」（同上、^{XVII}~^{XVIII}ページ）

このようにマルクスの哲学的見解が独自に形成されはじめるのは一八三七年にはいつてからであり、このことはのちにみるところの一八三七年一月一〇日付のマルクスの父への手紙にはっきりと示されている。

四 大学入学より学位論文提出ごろまでのマルクスの思想

一八三五年九月二四日、マルクスはトリールの高等学校を卒業し、父の希望によって、一〇月一五日以降、ボン大
学法学部で法学の勉強を始めた。

では、当時のボンのみならず全ドイツの状態はどのようなものであったろうか。

ドイツ王のオットー一世がドイツ各地を征服して領土を拡張、イタリアにも支配の手を伸ばして政權と教權を手にし、九六二年教皇からローマ皇帝の冠を授けられて成立した神聖ローマ帝国は中世から一九世紀初頭（九六二年〜一八〇六年）まで続いた。民族大移動から中世の半ばまではドイツ人は今日のドイツの西半部のみに住んでいたが、一二、三世紀ごろから西ドイツの住民が東方に植民して、オーストリアやプロシアの地を開拓し、一五世紀の終りにはドイツは大小の諸侯や自由市など約三〇〇の地方政權の集合体となった。近代社会の發展をひらく最初の第一歩といえる十六世紀初頭の宗教改革は、中世的帝国の基礎理念である皇帝というローマ的呼称に結びつく世界秩序の支配者としての理念を挫折させ、打撃を加えた。さらに、新教をおさえて帝權を強化しようとする皇帝と、帝權をおさえて權力

を得ようとする新教諸侯や諸市のあいだの争いであった一七世紀のドイツの三〇年戦争（一六八一～四八年）と、その結果であるヴェストファーレン条約によって、オーストリア、プロシアなどを含む三〇〇余りの領邦（この下に一千以上の騎士領があった）の権利が最高の権利として認められた。こうして各領邦はそれぞれ完全に独立した。しかしこれら領邦の君主たちは多少の例外はあったが、ほとんど先進国フランスの一八世紀のロココ式の華麗ではあるが技巧に走りすぎた絶対主義末期の頹廢的趣味にかぶれ、豪華な生活にふけり、民衆を苛酷な圧制下にしいたげ、民衆の幸福を無視して独裁専制を行っていたのである。

しかし「七月革命」の影響はドイツに波及せざるを得なかった。

ナポレオン没落後一五年間続いたブルボン王朝の専制政治を倒した一八三〇年のフランスの七月革命は、王をイギリスに亡命させ、封建的な特権を奪い、フランスの産業革命をようやく軌道にのせた。この七月革命によってドイツ人民は封建的反動支配打倒への新たな希望を抱き多くの学者・文化人は「自由・平等・博愛」の理念に熱狂し、これをヨーロッパ再建の原理として支持と共感を寄せた。しかし七月革命はドイツの領邦体制の打倒には直接の影響を与えることができなかった。

マルクスがボンに赴いた一八三五年当時のボンの情況は、「自由な祖国ドイツ」を要求して、職人や小市民や農民、学生が各地で武装蜂起まで起こしていたのであるが、しかし、これらの運動は分散しており、統一的指導部をもっていなかった。これに対し、ドイツの封建諸侯や諸政権は統一してこれら民衆の運動に対処し、進歩と自由を求めるあらゆるものを弾圧、追及し、数千の民主主義者を投獄し、あるいは国外へ追放した。検閲は厳しくなり、集会や政治団体は禁止され、ドイツ連邦諸国はすべての政治的亡命者を相互に引き渡す義務を実施したのである。

こうした政治的情况下で、マルクスはボンで勉強を開始した。マルクスはまず多くの法律問題に関する講義を聴講し、また文学史、芸術史、文化史なども受講して次第に自己の学問的視野を拡げた。

マルクスのボン滞在は約一年と一ヶ月にすぎず、一八三六年一月二三日ボンを去って、プロイセンの首都ベルリンに移り、ベルリン大学法学部に入學した。当時のベルリンは王室と軍隊の支配する町であり、まだ手工業と小生産が支配していたが、次第に資本主義的工業が市門の外で根つき發展し始め、工業の發展はわずか二、三〇年のうちにこの町の性格を根底から変えつつあり、ドイツにも新しい資本主義的富の蓄積とともに、早いテンポで新しい貧困が生まれ、産業ブルジョアジーとともにフランスやイギリスではすではつきりと形成されていたプロレタリアートという新しい階級が生まれつつあった。しかし、まだ封建的反動がドイツの支配者であったので、ドイツはまずみずから封建的な桎梏から解放する必要がある。

ドイツのブルジョアの改革は非常に複雑な条件下で行われなければならなかった。早くから中央集権的統一国家を形成し、したがって国民的市場を形成していたイギリスやフランスとは違って、ドイツの資本主義的生産様式は極くスローなテンポでしか成長することが出来なかったが、その理由は主として細分化されたドイツの領邦制であった。またヨーロッパの経済活動で重要な位置を占めている通商事業が、従来の地中海によるものではなくなり、アメリカの発見、インドへの航路の発見によって、イタリアからドイツを通ずる商業路が衰退したことも大きく影響している。こうしたドイツの後進性のためドイツのブルジョアジーはその政治的見解である自由主義、民主主義の主張において統一できず、政治的行動において団結することができないという弱さをもっていた。ドイツのブルジョア階級は、三〇年代まではまだ封建制を政治的に打倒できるほど成熟してはいなかったのである。こうしたドイツの後進性

は、逆にドイツをしてイギリスやフランスなどの先進国のイデオロギーを吸収することの必要性を増大させた。それは日本資本主義の後進・後発性が西欧文化の吸収に日本をかり立てたのと同様である。こうしてドイツはイデオロギー面で、きたるべきブルジョア革命を準備したのである。⁽³⁾

イギリスの経験論とよばれるベーコン、ホッブス、ロック、バークリ、ヒュームなどの教会の権威から解放された人間知性の哲学的目覚めに対し、ドイツ観念論ともいわれるカントからフィヒテ、シュリング、ヘーゲルに至るドイツ古典哲学は、単にドイツ一国の哲学にとどまらず、近代ヨーロッパの哲学全体に甚大な影響を及ぼし、青年マルクスが彼の哲学を形成する上に決定的ともいえる役割を果たした。すなわち一八世紀の終りから一九世紀の初めにかけてのドイツの古典文学、およびとくに古典哲学の果たした役割がそれである。これらのイデオロギーは先進国の思想を受け入れ、宗教の分野で、ブルジョアジーが政治の分野で闘っているのと同じ敵である反動的な封建階級と闘ったのである。

(3) ドイツ古典哲学の成立について、川田熊太郎氏は、次の二つの事情が大きく影響していると次の二点を指摘している。

一つは近代ドイツの後進性である。現実社会のうちで徹底した近代化を行えないドイツ中産階級は、その代わりに思想の世界のうちで、しかもみずからの屈曲した社会的立場を反映して、近代化の課題を遂行するほかなかったのである。彼らの子弟である知識人たちは、そこで、みずから直面していた思想的材料や道具だて、また、それらに固有の(哲学的)課題をもとにして近代化の課題を果そうとしたのである。

もう一つは、一八世紀当時のドイツの思想界がイギリスおよびフランスの近代市民哲学を自己のうちに受容したことである。

ドイツ中産階級は、屈曲した近代化の歩みにもかかわらず、いな、むしろ、その「後進国の《優位》」のゆえに、哲学の領域においては、後進国の位置を越えて近代哲学の自覚と「克服」という二重の課題を実現することを通して「哲学的同時代

人」になることができたのである。そして、この二重の哲学的課題を果す「哲学革命」の端緒を切り開いたのが、まさに、カントの『純粹理性批判』(*Kritik der reinen Vernunft*, 1781, 2 Aufl. 1787)であった。(川田熊太郎編『原典が語る哲学説の歴史』公論社、一六八一―一七〇ページ)「古典哲学者といわれるこれらの人々にみられる特徴はどんなものであったろうか」として、森宏一氏も次のように述べている。

「それは、……、一つには先進国だったイギリスやフランスの封建制社会から資本主義社会にむかうさいの、人間の平等と自由とを主張した啓蒙思想からの影響があり、またこういう思想からみてのドイツの封建的抑圧状態という現実を当面して思想上で自由・平等をもとめたことによる。すなわち、その哲学は歴史的には新しい社会へむかっている封建制からの脱却という要求にうごかされていた。しかし、カントからヘーゲルにいたる経過にはたしかにドイツ社会の進行はあったけれども、はじめのころはもちろんのこと、その後になっても封建制をうちくなく社会勢力としてのブルジョアジーの階級的結束がまだ未成熟であった。……そのために、かれらは、先進国の革命の現実にあらわれた旧支配階級(国王、封建貴族)と新支配階級(ブルジョアジー)との対立・抗争、それだけでなく新支配階級に対抗するあらたな階級勢力としての労働者階級(十分に階級として形成されない状態であったにしても)の出現という事態をながめて、階級間の調停をもとめ、革命によらないで人々の生活の好状態をかくとくする道をたずねる方向にむかった。これは、社会の新しい状態をつくりだす社会勢力をみいだしえなかつたことから生じたものであって、したがってそれらの哲学者があたえる解答は、現実のなかにおいてではなく、思考の上でつくりだされねばならなかった。こうして、ドイツ古典哲学者の学説は観念論の立場を、その特徴とすることになる。」(『哲学とは何か』合同出版、一九七六年四月、一九八ページ)

こうして生まれたのがドイツの古典哲学の代表者であるカント(Immanuel Kant, 1724~1804)、フイヒテ(Johann Gottlieb Fichte, 1762~1814)、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770~1831)、おとびフォイエルバッハ(Ludwig Feuerbach, 1804~1872)の思想であった。彼らの哲学は発展しつつある資本主義と遅れた封建制との闘いの中から生まれ、ドイツの若いブルジョアジーの政治的不徹底さを反映していたとはいえ、ドイツのブルジョア的改革のための道を切り拓いたのである。エンゲルスはのちにマルクス主義の三つの源泉ならびに三つの構成部分として、イギリス

の古典派経済学、フランスの社会主義、ドイツの古典哲学があげられるとして次のように述べている。

「科学的社会主義はじつに、本質的にドイツの産物である。古典哲学が意識された弁証法の伝統をいきいきともってきた国、すなわちドイツでこそ成立することができたのである。唯物史観と、それをプロレタリアートとブルジョアジーとの現代の階級闘争へ特別に適用することとは、弁証法を媒介としてはじめて可能であった。……吾々ドイツの社会主義者はサン・シモン、フリーエ、オーウエンの子孫であるばかりでなく、カント、フィヒテ、ヘーゲルの子孫でもあることをほこりとしているのである。」〔『空想から科学への社会主義の発展』ドイツ語第一版への序文、『全集』第一九卷、一八五ページ〕

さて若きマルクスとドイツの古典哲学との出会いはどのようなものであったか。

マルクスはベルリン大学法学部に入學し、大学の近くのミッテルシュトラッセ六一番地に一室を借りた。彼は父の友人の幾人かを儀礼的に訪問したのち、全精力を勉学にそそいだ。彼は刑法、ローマ法史および人間学に関する三つの連続講義の聴講を申し込んでいる。しかし彼は講義に頼らずベルリンでは自習を主体とし初めから自分で専門文献と原典を熟読し、抜粋をつくり、それについての評価をまとめることに努力した。この勉強方法は彼を非常に進歩させた。しかし、やがてマルクスは専門の法律の勉強よりはむしろ哲学の研究に熱中するようになった。「……私は法律学を勉強しなければならなかったが、なによりも哲学と格闘したい衝動を感じた」と彼はこのころについて書いている。事実、そのころ一つの世界観をつくりあげるための学生マルクスの情熱的な勉強が開始されたのである。

このようにマルクスは——父への約束に従って——法律学を勉強し、すでにベルリンでの最初の学期に、通常の課業で指定されたよりずっと多くの専門文献を読み、さらに個々の事実や命題を学ぶだけでは満足できず、学問全体へ

の総括的認識をもとうと意欲し、彼自身の哲学を確立するための道を歩みはじめた。この頃のマルクスは、すでにみたようにそれまでの教養と教育の結果、哲学的には観念論者であり、とくにカントとフイヒテ、ならびにフランスの啓蒙家ヴォルテールやルソーの影響を受けていた。そこでマルクスは青年の若々しい抱負のままに、法のすべての領域をとりいれて一つの法哲学の体系にまとめてみたが、やがてそれも彼自身の自己批判に耐えない不十分なものとして清算したりなどしている。

マルクスがそのこの新世界観形成への途を本格的に歩み出すようになったのは、一八三七年の末ごろからで、このことを示しているのが同年一月一日付の父への手紙である。

この手紙は学生時代のマルクスの唯一の保存されている手紙である。マルクスの娘エリナが一八九七年にこの手紙を『ノイエ・ツァイト』に公けにし、前書きで、「それは出来上がりつつある若いマルクスを私たちに示し、若者のうちに、やってきつつあるおとなを私たちに示す」ものであると述べているが、一九歳の学生がベルリンにおける彼の勉学の第一年について報告しているこの文書は、若いマルクスの多面的な精神的関心を浮き彫りにしており、一つの世界観を自己のものにしようとするための彼の苦悩をまざまざと私たちに見せてくれる貴重な文献となっている。この手紙のなから当時のマルクスを理解するために役立つ若干の箇所を引用しておこう。

「私は法学を研究しなければならなかったのですし、そして哲学と取り組みたい衝動をとりわけ感じたのです。」
【全集】第四〇巻、四ページ）

「私は私の読んだあらゆる書物から抜粋をつくる習慣を身につけていた。」（同上、八ページ）

「……法、国家、自然、全哲学といったような生きた思想世界の具体的表現においては、客観そのものがその展開

のなかで窺い知られねばならず、勝手な分類はもち込まれてはならず、事物そのものの理ことばが、それ自身のうちで相剋しているものとしてところがり続けていって、自身のうちに自身の統一を見いだすのでなければならぬのです。」(同上、五ページ)

「またしても私には哲学なしにはやっていけないことがはっきりしてきていたのです。そんなわけで私は意を安んじて今一度、哲学に身を投じることができ、一つの新しい形而上学的根本体系を書き、その終りのところで私はまたしてもその体系と私のこれまでの努力のことごとくがまちがっていたことを否応なしに知らされるはめになったのです。」(同上、七、八ページ)

「私が——ついでに申しますと——カントおよびフィヒテの観念論になぞらえてはぐくんできていた観念論から私は、現実的なものそのものうちに理念を求めるところへ行きつきました。神々は、かつては天上に住まっていたとすれば、今では大地の中心になっていたのです。」

私はヘーゲル哲学を断片的に読んだことがありましたが、この哲学のグロテスクで厳いびのような旋律は私の気には入りませんでした。もう一度、私は海にもぐり込みたいと思ったのです。ただし精神的自然を物的自然と同様に必然的な、具体的な、しっかりと仕上げられたものとして見いだそうという一定の意図をもってであり……」(同上、九ページ)

「私の不快中、私はヘーゲルを始めから終りまで、彼の弟子たちの大多数をもふくめて、知るようになっていました。」(同上、一〇ページ)

「シュトラウワでの友人たちとのたびたびの集まりを通じて、私はあるドクター・クラブにはいることになった

のですが、そのうちには何人かの私講師と、ベルリンの友人のなかで私の最も親密なルーテンベルク博士がいました。ここでの論争のなかで多くの相容れない見解があらわになってきて、それまで私は今日の世俗哲学からのがれたつもりでいたのに、かえってますます固くそれに縛りつけられたのです……」（同上）

『マルクス・エンゲルス全集』第四〇巻の訳文にして一〇ページに及ぶ若きマルクスの赤裸々な内面告白であるこの手紙は、しかしながらマルクス家によって当初歓迎されなかったようである。

「殊に健康のすぐれなかった父は、息子のうちにひそんではいないかとかねがね恐れていた『悪魔』(Demon)をまのあたりに見る思いがしたという。そういう雰囲気は、それから約一カ月後の十二月九日附の父の長文の返事の中に、はっきりと窺われる。その中で憤懣やるかたなき父はカールに対し、『果すべき課題はいったいどういう風に解決されているか』と問い、そして自ら次の様に答えている。

なげかわしい!! 全くだらしがない (Ordnungslosigkeit)。ただ知識の凡ゆる部分をぼんやりうろつき廻っているだけではないか。……この間までビールのコップを脇においてずさんでいたのが、こんどはその代りに、学者のようなまきを着、くしを入れないばさばさの髪をしてずさんでいるだけではないか。……お前の汚い部屋では多分典型的な無秩序の中で、イェンニーの愛の手紙も、父の好意ある、しかもおそらくは涙で書かれた訓戒も、たばこのつけ木に使われているのであろう。尤も、更に一層無責任ならしなごのために、第三者の手に渡るよりは、まだましかも知れない。

こういう調子で長々と辛辣な皮肉を浴せかけた……」（前出、淡野『初期のマルクス』六三―四ページ）。しかし、「右の十二月九日附の激しい手紙から約二カ月後の一八三八年二月十日附の手紙では、マルクスの父は——一カ月の病床か

ら離れたばかりのせいもあるけれども——『疲れたから武器をおく』と宣言し、更に『私がお前を心の奥底でいつくしんでいること、そしてお前が私の生活の最も強力な動力の一つであることを常に信じて、決して疑ってはならない。』と温情のこもった言葉を書き連ねている。』(同上六四ページ)。そして、この手紙を書いてからちょうど満三カ月目の一八三八年五月一日に、マルクスの父は永眠したのである。

さてこのように一八三七年一月一日のマルクスの父への手紙は、マルクスが彼の新世界観を確立しようとして苦闘し、またドクター・クラブで多くの刺戟をうけ、哲学の研究に深入りしていく当時のマルクスの姿をなまなましく私たちに示している。

またさきの手紙でマルクスが書いているように、世界は客観的に存在するのではなくて、自己の意識の創造物として存在するにすぎない、というカント的な主観的観念論の限界を次第にはっきりと認識しつつあることを一九歳と六カ月のマルクスの父への手紙は示しているのである。すなわち生きた思想世界の具体的な表現であるところの法とか国家とか自然などの哲学全体において問題となる対象そのもの自体が、その発展において認識されなければならない、恣意的な観念的な区分をしてはならず、事物自体の理性は、自らのなかで抗争し、回転しつつ、自らのなかで統一を見いださなければならない、とマルクスは考えるようになり、彼がカントやフィヒテを学んでつちかかってきた観念論を離れて現実的なものそのもののなかに理念を求めようになり、神々は以前は現世の上に住んでいたが、いまでは現世の中心にならなくてはならないと結論しているのである。ここにはマルクスがカントやフィヒテの主観的観念論から脱却しつつあることが示されている。そして、右の手紙でマルクスは現代の世界哲学、つまりヘーゲル哲学にますます強く自分を結びつけたと父に報告し、ヘーゲルへの思想的移行が行われつつあることを表明している。マルク

スはすでにベルリン大学の教師たちからヘーゲル哲学を勉強するようすすめられてはいたが、何よりも彼をヘーゲルに導いたのは、当面する彼自身の世界観の確立と、現実に展開されている政治上の問題に対して実践的に対応しようとする姿勢であり、自己の哲学的見解を現実と、すなわち人類の歴史および現在と一致させようとするマルクスの志向がヘーゲル哲学への取り組みに彼の情熱をかきたてたのである。

次に「父への手紙」でマルクスが述べているドクトル・クラブについてみよう。このクラブへの入会は、マルクスの学問研究に対して極めて大きな影響を与えた。彼は一八三八年の春から三年間このクラブに所属し、多くの人と交友を結んだが、特に親しくなったのは九歳年長の神学講師パウエル (Bruno Bauer, 1809-82) であり、彼の感化によってマルクスは次第に青年ヘーゲル派 (Jung-Hegelianer) に移行した。このクラブ生活でマルクスはその真価をいかんなく発揮し始めた。ドクター・クラブは、教会や政府に忠誠な大学人たちの会ではなくて、逆に宗教への批判を掲げた造反者たちの集いであった。ここで彼らは、はげしい論争をたたかわせるなかで哲学的・理論的および政治的・イデオロギー的な見解を發展させた。マルクスは一八四一年に大学時代が終わるまでドクター・クラブに所属し、ここで彼はヘーゲルの弁証法を学び、歴史を、永遠の發展のなかでとらえられた、低いものから高いものへと上昇する發展過程として、理解するようになった。マルクスはこのクラブの年上の友人たちから非常に多くのことを学んだ。しかし彼の思考はやがて彼らとはちがった道を進みはじめた。彼らはヘーゲルの弁証法を現実との具体的関連なしに、主として精神的・思弁的な領域、とりわけ宗教批判で利用したのに対して、マルクスは哲学を現実のための学問とみた。もちろん彼は宗教批判がもっていた意義をみなかたではない。逆に宗教の批判はあらゆる批判の前提であるとし、宗教の批判は宗教を後光とするこの世界の批判をはらんでいるとしたのである。マルクスがヘーゲルの思想世

界に入りこみ、主観的觀念論の袋小路から脱出したのはヘーゲルの哲学であつたが、マルクスはこの道を弱い蠟燭の光の下で夜を徹するというような骨の折れる研究によつて踏破したのであり、やがてマルクスはドクター・クラブの主役の一人となるのである。⁽⁴⁾

(4) 青年ヘーゲル派の一人モーゼス・ヘスが一八四一年の夏に友人ヘルトルト・アウアーバッハにあてた手紙には次のように書かれている。

「……君はいまからそのつもりでいてよいのだが、いま生きている最大の、おそらくはただ一人の**本物の哲学者**と君は知合いになるだろう。その人はまもなく公然と現われ(著作でも講壇でも)全ドイツの注目を集めるだろう……」

マルクス博士——ぼくの偶像の名前はそういうのだが——はまだ本当に若い(せいぜい二四歳ぐらい)、中世的な宗教と政治に最後の一撃をくらわせるだろう。彼は最も深い哲学的まじめさと最もしんならつな機知とを結びあわせている。ルソー、ヴォルテール、ドルバック、レッシング、ハイネ、ヘーゲルを一身に統合している人を考えてみたまえ。そうだ統合しているのだ、つぎあわせているのではない——マルクス博士とはそういう人だ。」

またマルクスより一歳も年長のケッペン(Karl Friedrich Köppen)は一八四〇年に発表した著書を「トリエル出身の友」カール・マルクスに献じている。

一八四一年四月一五日、マルクスは二三歳で「デモクリトスの自然哲学とエピクロスの自然哲学の差異について」(Über die Differenz zwischen der demokritischen und epikureischen Naturphilosophie)と題する論文をイエーナ大学に提出してドクトルの学位を授けられた。淡野氏は前出著書で「マルクスが学位論文においてデモクリトスやエピクロスというような古代の哲学者をとりあげたことについては、当時パウエルやケッペンなどがその立論に際して盛んにストア学派・エピクロス派・懷疑学派を引き合いに出していた事実が、指摘されなければならない」(六六ページ)と述べているが、エピクロス主義、ストア主義および懷疑主義の哲学的諸潮流にたいする青年ヘーゲル派の関心はこ

これらの哲学のうち青年ヘーゲル主義者たちが共和的—民主的方向と、宗教からの解放を見いだしていたからであり、これらの哲学的諸潮流の検討によってマルクスは、青年ヘーゲル主義の理論的基礎づけを意図していたと考えられる。

マルクスはその学位論文のほかにエピクロス派、ストア派および懷疑派の哲学にかんする膨大な著述のための準備ノート七冊（『マルクス・エンゲルス全集』第四〇巻所収）を一八三九年に書き上げていたが、そこにおいてもレーニンによれば「まだまったくヘーゲル学派の観念論の立場」に立っていた。しかし同時にこれらの労作のなかには青年ヘーゲル派的立脚点にもとづいてヘーゲル哲学の批判的考察がみられているのであり、個々の問題においては部分的に青年ヘーゲル派の友人たちを乗り越えていたといわれている。